第１章

鈴鹿山脈南麓の環境史と「くすり」の産地の近現代

――甲賀の薬業の誕生と地域活動の展開から

石橋弘之
早稲田大学人間科学学術院

1.　はじめに――鈴鹿山脈と近江のくにの「くすり」の歴史

「くすり」という言葉はどこからきたのか。その語源には諸説あるなかで、「奇異なる力」を意味する「クス」「クシ」という語にその由来をみいだす説がある[1)]。「奇異」であり、「霊妙」でもある、「不可思議」な力のあらわれを「くすり」という言葉に見出したものだ（杣庄編 1975: 8–9）。

「草」を「クサ」と呼び、その音が「クシ」とも似ていることは、偶然かもしれないが、あるいは、「奇し」という言葉とも何らかの深い関係があるのかもしれない（杣庄編 1975: 9）。いずれにしても、植物が生まれ育つことを不思議な現象と受けとめ、蔓などを身体にからませてその生命力を身につけ、さらに服用して体内にその生命力をとりこもうとする、その過程で、草根木皮を生薬とするようになったことが想像される（杣庄編 1975: 9）。

日本列島のなかで鈴鹿山脈とその周辺は「くすり」の歴史とかかわる地域が点在する。富山や奈良、そして滋賀県の甲賀や日野は後に述べる「おきぐすり」として知られる配置売薬がおこり展開した。

そのなかで、滋賀県は、近江と呼ばれていた頃から、薬草の記録が残る。たとえば、万葉集には、天智天皇（在位 668 ～ 672）が「遊猟（みかり）」をした時に詠まれた歌が収められていることを『滋賀の薬業史』は紹介している（杣庄編 1975: 15）。

1）「くすり」という語に関して国語学者、大島正健氏は「国語の語源とその分類」の中で、「奇異なる力を意味するクス・クシ（奇し）の活用語（動詞）クスルが名詞化したもの」とした（杣庄編 1975: 8–9）。大島正健（1859 ～ 1938）は、漢字音の研究で知られており、中国漢字音、日本漢字音にかんする著書が多数ある（「大島正健」，日本大百科全書（ニッポニカ），JapanKnowledge）。

○天皇、蒲生野に遊獵の時、額田王の作れる歌

あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

○皇太子の答へまししし御歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人嬬ゆゑに我恋ひめやも

額田王が詠んだ歌に、天智天皇の弟にあたる大海人皇子が歌で答えた贈答歌である。この歌にそえられた注釈から、668年5月5日、琵琶湖の東にある平野、蒲生野で薬猟（くすりがり）をした時に詠まれたものであることを知ることができ、「これは滋賀県の最古の薬に関する記録」ともいわれている（杣庄編 1975: 15）。

薬猟とは、もともと大陸から伝えられた行事であり、古代の日本では陰暦五月五日にシカの若角や薬草を採る宮廷行事であった[2)]。日本書紀のなかで、推古19年5月5日（611年6月20日）、現在の奈良県にある宇田野で行われた薬猟が日本で最初の記録とされている[3)]。

近江からは平安時代に薬草を貢納した記録もある。延喜式（927年）には、全国各地から生薬を朝廷に貢納したこと、そこには、それぞれの国が貢納した生薬の種類と量が記されており、「いずれの国からも数種類、少ないものでも一種について五十斤、多いものは一石にも及ぶ量」であった（杣庄編 1975: 19–20）。そのなかで、「近江国からは七十三種が採取されて進貢されておりこれは種類に関していえば、全国第一位を占め」ていた（杣庄編 1975: 19）。

近世から現代にかけて、滋賀県は商売としての薬業が盛んな地域としても知られてきた。江戸時代に日野の売薬から製造販売がはじまった「萬病感應丸」をはじめ、明治期以降の甲賀では現代の製薬企業の源流となる会社がいくつも起こされた（c.f. 進藤 1992）。厚生労働省の薬事工業生産動態統計年報は、令和元年の滋賀県の医薬品の生産金額は、5,449億円、全国シェアは5.7％、全国順位は第5位、としている[4)]。加えて、滋賀県内の地場産業のなかで、甲賀や日野を中心とする製薬企業は令和元年の生産金額は656億円であり、県内の9つの地場産業のなかで第一位にある[5)]。

以下、本稿では、滋賀県のなかでも甲賀の薬業は、どのようにしてはじまり、

2）「中国では《楚歳時記》によると、6世紀中葉ころ、揚子江中流域で、5月5日の端午の節句（夏至に近い）に、毒気を避けるため、香りの高いショウブやヨモギ、種々の薬草を摘む習俗があった。日本古代の薬猟は、百済を経由して伝えられたこの古代中国の民間習俗と、高句麗の宮廷で3月3日に行われていた鹿狩りの風習が併せて取り入れられ、推古朝に宮廷行事として成立したらしい」といわれる（「薬猟」，世界大百科事典，JapanKnowledge）。

3）日本書紀〔720〕推古一九年五月（寛文版訓）「十九年の夏五月の五日に、菟田の野に薬猟（クスリカリ）す。鶏鳴時を取りて、藤原池の上（ほとり）に集ひ」（「くすり‐がり【薬猟・薬狩】」，日本国語大辞典，JapanKnowledge）。

4）「滋賀県の製薬業界」滋賀県ホームページ（shiga.lg.jp）（https://www.pref.shiga.lg.jp/yakugyo/gyoukai/306423.html）2022年2月2日閲覧。

展開してきたのかを、鈴鹿山脈の環境と甲賀の近現代の歴史、そして現在の地域活動からみていきたい。

2.　鈴鹿山脈南麓、甲賀の地域概要

鈴鹿山脈の南麓に位置する滋賀県甲賀市は、琵琶湖にそそぐ最大の河川である野洲川とその支流が通る水の径の上流域にあり、川の谷筋に丘陵地が広がる（図1、写真1）。野洲川の支流、杣川をさかのぼると油日岳へ、杣川の支流、大原川をさかのぼると那須ヶ原山へ、いずれも鈴鹿山脈の南麓と接する山へとたどりつく（石橋・石田・高橋 2020）。

甲賀市の南東、大原川が丘陵地を開く地形は大原谷と呼ばれており、その谷筋に集落が点在してきた。明治期の町村制の施行時には大原村、油日村、佐山村の3村ができる。戦後にこの3村を合併して甲賀町となった。2004年には甲賀町、甲南町、土山町、水口町、信楽町を合併して甲賀市が設立された（甲賀市史編さん委員会編 2016; 石橋・石田・高橋 2020）。

大原谷の西方にも信楽高原へと続く山々が連なっている。そのなかで、甲賀市のほぼ中央にある飯道山（はんどうさん）は、もともと穀物と水の神として信仰され、その後の神仏習合の浸透とともに、修験道の霊山として知られるようになった（石丸 2005）。飯道山とその周辺には山伏とゆかりのある場が各地にあり、後に述べるように、甲賀の薬業の起こりとも深くかかわる。

鈴鹿山脈南麓に広がる丘陵地は交通の要所としての歴史もある。滋賀県と三重県の県境にある鈴鹿峠は、「伊勢と京都を結ぶ東海道の交通の要地」ともいわれてきた。そのなかで、甲賀の丘陵地は鈴鹿山脈にたいして、なだらかに連なることから、「交通路の設定が比較的容易」[6] である。このことが東と西を結ぶルートが複数あるなかで、鈴鹿越えのルートが主流とされるようになった背景にあるといわれる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13–14）。このような甲賀の立地は、後にみる売薬行商を担った人びとが各地を行き来する下地にもなったと思われる。

野洲川の上流域にある甲賀市は琵琶湖の水源をなす森林が広がっており、甲賀ヒノキの産地としても知られてきた（石橋・石田・高橋 2020）。2018年の市の森林面積は6割をこえ、そのうち9割は民有林で占められており、民有林の約5割はスギ、ヒノキの人工林である（滋賀県・甲賀市 2018）。これらの人工林には、幕末以降、薪や薪炭の需要が高まり甲賀郡の山が皆伐された後に、明治初期から甲賀の人びとが世代を重ねて植林をしてきた歴史的背景がある（石橋・石田・高橋 2020）。そのため、明治以前と現在とでは地域の森林は大きく変わっていることに注意が必要である。

5）脚注4）におなじ。

6）「すずかこくていこうえん【鈴鹿国定公園】滋賀県・三重県」，新版 角川日本地名大辞典，JapanKnowledge。

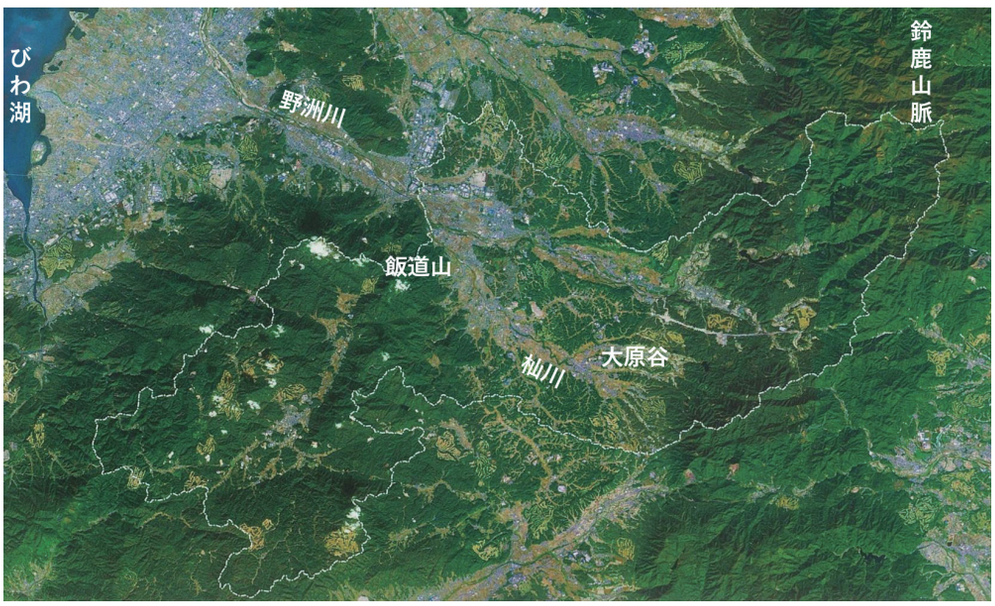

図１　人工衛星からみた甲賀市とその周辺
出所）『甲賀市史第１巻 古代の甲賀』口絵。地名は筆者による加筆。

写真１　甲賀の丘陵地と鈴鹿山脈の遠景（2019 年 10 月 27 日筆者撮影）
飯道山に隣接する庚申山から甲賀市を見渡す。写真手前は丘陵、その向こうに大原谷が広がり、その奥に鈴鹿山脈が連なる。

3.　甲賀の薬業のはじまり

ここからは甲賀の薬業は、どのようにはじまったのかを、鈴鹿山脈の地理と植生、古琵琶湖層の土壌と農業の条件、明治以前からの薬の知恵の蓄積、そして明治以降の宗教近代化政策への山伏の対応、という側面からみていきたい。

3.1. 鈴鹿山脈の地理と植生

鈴鹿山脈は日本海側から太平洋側にかけて南北に山脈が連なることから、その地理と植生の特徴に関心がむけられてきた（福岡 1965）。本州をタテに縦断する鈴鹿山脈は、伊勢平野と近江平野、伊勢湾水系と琵琶湖水系を東西に分け

ており、本州のほぼ中央に位置するその立地から北方系と南方系の動植物が混在することが知られてきた[7]（図 2）。

鈴鹿山脈にみられる動植物の分布の特徴は、その北から南にかけての立地によって異なる気候と地質の環境条件から説明できる[8]。すなわち、鈴鹿国定公園の北部は日本海側の気候から影響を受けるのに対して、その南部は太平洋側の気候から影響を受ける。そして、鈴鹿国定公園の北部は石灰岩地帯をなすのに対して、南部は花崗岩地帯をなす。このように東日本と西日本を分かつ立地にあることから、動植物が多様になっているといわれる。

この環境条件に照らすと、鈴鹿山脈南麓にある甲賀は、太平洋側の気候から影響を受け、花崗岩地帯と重なる立地にあることがわかる。

図 2　日本列島のなかの鈴鹿山脈の位置

3.2. 古琵琶湖層の土壌と農業の条件

琵琶湖は移動する。いまの琵琶湖のもとになる地層の堆積は、およそ 430 年万年前、伊賀盆地からはじまり、そこから西北に移動して、現在の湖の姿となった（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13, 40）。その痕跡は、古琵琶湖層群と呼

7）「鈴鹿国定公園」，日本大百科全書（ニッポニカ），JapanKnowledge。
8）「みんなの奥永源寺」（http://okueigenji.co.jp/know4.shtml）2022 年 2 月 10 日閲覧。

ばれる地層にみることができる。古琵琶湖層群とは「大昔の湖沼やそこへ流れ込んだ河川の堆積物でできた地層」のことであり、近江盆地から伊賀盆地にかけての丘陵に広がる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 40）。野洲川上流では、古琵琶湖層群が谷沿いに丘陵群を構成しており、小河川で深く開析が進んだところは、農地や集落の立地と重なる（甲賀市史編さん委員会編 2007: 13）。

とりわけ甲賀町から甲南町にかけての丘陵は、「厚い粘土層が砂層を挟んで重なって」おり、その堆積は「この地域に安定した深い湖が長く続いたことを語っている」（甲賀市史編さん委員会編 2007: 41）。

甲賀町のなかで薬業は大原と油日で主に発展した（杣庄編 1975: 78; 神郷土史編集委員会編 1999: 443）。その背景として、大原と油日はともに、耕地面積が限られていること。水田が重粘土質[9]のため、冬の田んぼに水をはる一毛作が多く、「春秋の農繁期を除いて余剰労働力が比較的豊かであったこと」が指摘されている（神郷土史編集委員会編 1999: 443）（写真 2）。この後で述べる配置売薬も農閑期を利用して行われるようになった（油日創意と工夫の郷づくり委員会 1998: 399）。

以上のような古琵琶湖層群を地盤とする農業の条件は、その他の産業が発展する余地をつくり、そのなかで薬業が起こったことを自然環境の側面から示唆する。

3.3. 明治以前の山伏たちの薬の知見

甲賀で商売としての薬業がおこるのは明治以降である。しかし、それ以前から薬の知恵は蓄積されてきた。その担い手となったのは山伏の人びとであった。甲賀の山伏には、飯道山で修行する「山上の山伏」とともに、山麓の村に居住

写真 2　古琵琶湖層群の粘土（2019 年 10 月 19 日筆者撮影）

9）古琵琶湖層は、火山灰と粘土の混じった凝灰質泥岩からなり、地元の人のあいだで「ヌリ」「ズニンコ」などと呼ばれる。青色を帯びた粘土が混じったものはカリウムを含んでおり、田んぼの客土にも利用された。いっぽうで、重粘土層の地質は、日照りにあうと田んぼの表面や畔に深く亀裂が入り干害を起こしやすく、復旧に大きな労力が費やされた（大原貯水池土地改良区 2003: 2）。

する「里山伏」と呼ばれる人たちがいた（甲賀市史編さん委員会 2014: 410; 甲賀市史編さん委員会 2015: 195）。

甲賀の里山伏は、「飯道山周辺の村々に居住し、さまざまな世俗的活動を通じて庶民と深くかかわった」（甲賀市史編さん委員会 2014: 410）。その特徴の一つとして、「村落に定着し、庶民に対して配札や勧進（かんじん）、卜占（ぼくせん）や祈祷、医療などさまざまな願いに応じるための社会的活動、すなわち里修験としての活動が顕著にみられた」（甲賀市史編さん委員会 2014: 414）。そして、山岳修行を行ういっぽうで、「各地の社寺の本願書に所属して、社寺造営のための勧進や配札業に携わっていた」（甲賀市史編さん委員会 2014: 414）。

甲賀の山伏は加持祈祷先での土産物として薬も配っていたことから、薬僧とも呼ばれており、このことは甲賀の薬業の起源の一つにも位置づけられている（神郷土史編集委員会編 1999: 441–443）[10]。

甲賀の薬僧は朝熊（あさま）坊と呼ばれたグループと、多賀坊と呼ばれたグループがあった（神郷土史編集委員会編 1999: 443; 進藤 1992: 56–57）。一方の朝熊坊とは、伊勢国朝熊嶽明宝院に所属し、朝熊信仰を全国に広めた山伏である。朝熊坊は、甲南町の竜法師を拠点としており、祈祷のさいに「万金丹」という薬を携行し、望月家が指導的な立場にあった（進藤 1992: 56–57）。他方の多賀坊は、多賀大社の不動院に所属した。多賀坊は甲南町の磯尾を本拠としており、御札を巡回配布したさいに「神教はらぐすり」という薬を土産物として持参し、木村家が指導的な立場にあった（進藤 1992: 56–57）。

3.4. 明治以降の宗教近代化政策への山伏の対応

明治政府による宗教の近代化をはじめとする政策は、それに対応した甲賀の山伏たちが薬業を創業するきっかけとなった。その発端は、江戸時代まで仏教を基礎においた政策から、神道を軸とする政策へと転換した明治政府が、明治元（1868）年に神仏分離令をだすことで、神社から仏教色を排除し、寺院内の小社を独立、分離させたことにはじまる（甲賀市史編さん委員会 2015: 185）。明治 5（1872）年 9 月には、明治政府が「修験宗」を廃止、明治 17（1884）年には配札禁止令が出された（甲賀市史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999; 442）。

神仏分離令の影響は、甲賀の飯道山を拠点とした「山上の山伏」にも及び、明治 4（1871）年頃には「山上の飯道寺が廃寺となり、その時に寺僧はほとんど下山したといわれる」。

明治政府による修験宗の廃止と配札禁止令は、甲賀の山麓に居住した里山伏にも影響を及ぼした。江戸時代まで山伏たちは得意先としてきた各地の旦那場で祈祷と配札を行い、その見返りとして米や銭を受け取っていたが、「配札によって寄進を受ける」ことはできなくなった（甲賀市

10）この他に甲賀武士を薬業の担い手の起源に位置づける説もある（神郷土史編集委員会編 1999: 441–443）。これについては、後述する。

史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999: 442)。

さらに、明治政府による医療の近代化政策は、それまで山伏たちが秘伝としてきた製薬を制限もした[11)]。明治 3（1872）年の売薬取締規則は、「神仏の名を語り、家伝秘宝などと称して売薬をすることを禁じた」からである（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。

こうした明治政府の政策にたいして、山伏たちは、これまで配札の傍ら行なっていた薬の製造と販売にとりくむとともに、それまでの配札先としてきた旦那場（得意先）を薬の配置先へとすることで、売薬業を生計の一つとするようになった（甲賀市史編さん委員会 2015: 195; 神郷土史編集委員会編 1999: 442）[12)]。

ここにみる山伏の対応は甲賀の配置売薬が誕生する契機となった。その特徴は「甲賀の売薬は、得意先に薬を預け置き、次回の訪問時に使用した薬の代金を集金する配置売薬で、信仰をなかだちとした信頼関係がその底辺にあった」こと、「地場産業として発展した「甲賀のくすり」は、甲賀の山伏たちがその礎を築いた」ことにある（甲賀市史編さん委員会 2014: 430)。

明治初期の甲賀郡の売薬行商が修験者による配札の面影を残していたことは、古老への聞き取りをもとに当時の様子をまとめた次の記述にもみることができる（杣庄編 1975: 74)。

> 旅（行商）には羽織はかまの正装で、供人を従えて出かけたという。旅先では戸長の家などに先ず立ち寄り、大祓や般若心経をあげるのが普通であった。そうした所に村人を集めて祈祷をし、村人が持ち寄った薬の袋に持参した薬をつめたりすることもあったという。医療にめぐまれない土地の人たちは、売薬行商人を単なる商人として見ていたのではなかった。その訪れを待ち望んで、ほんとうに有難がっていたという。旅先では、生まれた子供の名付け親になったり、八掛を見たりするといったことも多かったようである。明治 17 年の配札禁止令公布以降も、なお配札を続けた家もあったというし、配札はなくなっても宗教色は容易に消えたのではな

---

11) 甲南町、下磯尾にある小山快玄家の東雲舎に残された史料のなかには、製薬法を秘伝としたことを、「一子相伝秘薬也、他見無用、必ず伝授致すべからざるもの也」と記している（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。小山快玄家は京都祇園社の配札を行い、医療や製薬にもかかわっていたことを記した史料が残されており、九州英彦山との間で医療のやりとりをした記録も残されているという。

12) たとえば、朝熊坊が土産物としていた万金丹が販売されるようになった次の例がある。伊勢朝熊山内の塔頭普明院に所属した小山快玄家は、同院が配札先としていた四国伊予（愛媛県）を万金丹の販売先とするようになり、明治 10 年には「「売薬行商鑑札御願」を出し、「伊勢朝熊万金丹」の名で売り出」した（甲賀市史編さん委員会 2014: 429)。

かったのである。

こうして、山伏たちは、もともとは副業としてきた薬の製造と販売を本業とするようになる。この動きがその後の甲賀の薬業へと展開していくことになる。

4.　明治初期の甲賀の売薬業の概況

明治初期、甲賀の売薬業は現地の人びと生業のなかでどのような位置づけにあったのか。

明治 13（1880）年に刊行された『滋賀県物産誌』は、滋賀県が町村の産業実態を知るためにおこなった物産調査の記録であり、明治初期の地域の産業の概要を知ることができる。『滋賀県物産誌』をもとにして、現在の甲賀市にある五町の集落を対象に、明治初期の産業動向を整理した『甲賀市史第 4 巻 明日への甲賀への歩み』によると、農業が 8 割以上を占めるいっぽうで、余業としての生業が数多くあった（甲賀市史編さん委員会 2015: 82）。

そのなかで、甲南町域と甲賀町域では売薬を、農業余業および本業とする人もいた。すなわち、甲南町域では、農業余業としていた売薬商は龍法師（現在の竜法師）におり、これを本業としていた売薬商は野尻・礒尾・新治にいた（甲賀市史編さん委員会 2015: 87）。甲賀町域では「ほとんどが農業を主にして」いるなかで、「商業関係では売薬業の萌芽が大原中と滝でみられ」た（甲賀市史編さん委員会 2015: 86）[13]。

同じく『滋賀物産誌』をもとに売薬行商にかんする記述を参照した『滋賀の薬業史』は、「江戸末期から明治初期にかけて、甲南町から甲賀町へ売薬業が拡大した」としている（杣庄編 1975: 73）。また、当時の売薬行商の範囲は広く、伊賀（三重県北西部）、山城（京都府東南部）、越前（福井県東部）などの近隣だけでなく、播磨（兵庫県南西部）、作州（岡山県北部）にまで及んでいた（杣庄編 1975: 73; 甲賀市史編さん委員会 2015: 86）。

明治期の鉄道建設も売薬行商が及ぶ地理的範囲を広げた。明治 13（1880）年に京都と大津（のちの浜大津駅）を結ぶ官営鉄道が開通した後には、「旧東海道沿いの宿場町を私営鉄道によって結ぶ計画が、京都府・滋賀県・三重県の財界人を中心に進められて」いた（甲賀市史編さん委員会 2015: 64）。この計画は草津と四日市を結ぶ関西（かんせい）鉄道として具体化され、明治 22（1889）年に草津駅から三雲駅の区間が開通、明治 23（1890）年 2 月 19 日、三雲駅から柘植駅までが開通する（甲賀市史編さん委員会 2015: 66）。いっぽうで、関西鉄道の路線沿いにあった甲賀町の油日村は、最寄り駅が遠かったことから、油日村と隣接する大原村との共同誘致によって大原駅（のちの甲賀駅）を設置し、売薬行商人の往来や木材の搬出を促した（甲賀市史編さん委員会 2015: 70–71）。甲賀郡を

13) 甲賀町域の農業余業には、製茶、養蚕、炭焼き、採薪などもふくまれた（甲賀市史編さん委員会 2015: 86）。

通過する関西鉄道の開通は「全国的にみてもかなり早い時期であり、京都、伊勢方面への交通は飛躍的に便利になった」(甲賀市史編さん委員会 2015: 66)。

5.　甲賀で薬業を起こした人物

甲賀の薬業を起こしたのはどのような人たちだったのか。現在の甲南町から甲賀町の範囲へと薬業が広がった流れをふまえつつ、明治初期に薬業を担った主な人物をみていきたい。

5.1. 売薬製造を開始した望月本実

甲賀郡で最初の売薬業は、甲南町域の望月本実が起こしたことが知られている（杣庄編 1975: 70–71)。現在は甲賀流忍者屋敷としても知られる甲賀武士の家に生まれた望月本実は、明治初年に竜法師で売薬製造業を営みはじめる。明治 10（1877）年頃には同業者が 10 数人おり、明治 24（1891）年には望月氏らが共同製剤所を設立、その 3 年後に望月合名会社を設立、さらに、配札禁止令が出された後には、明治 35 年に地元の同業者とともに近江製剤株式会社を設立した（杣庄編 1975: 70–71)。近江製剤株式会社は、「製薬機械を設置し、当時としては大規模な製薬と売薬業を営」んでいた（甲賀市史編さん委員会 2014: 430)。

5.2. 配置売薬の販路拡大と組織化をすすめた渡辺詮吾とその弟子たち

その後、売薬と製薬の方法を甲南町から甲賀町へと伝えたのが、「事業家」とも「甲賀売薬の元祖」とも紹介される渡辺詮吾[14]（図 3）であった（杣庄編 1975: 74–75; 人物誌編集委員会編 1980: 70–72)。弘化 4（1847）年 5 月 7 日、甲賀町の油日村、大字滝に渡辺茂兵衛の弟として渡辺詮吾は生まれた。幼少時は良平と呼ばれ、甲南町の寺庄にあった酒屋で丁稚奉公として働き、「その時たまたま縁故にあたる池田兵五郎氏の勧めもあって、同所池田詮吾氏のもとで配札に従事する」ようになり、一時は池田家の養子となって「詮吾を襲名」した（杣庄編 1975: 74; 人物誌編集委員会編 1980: 71)。この池田家は飯道山の岩本院による修験の家であり、「明治になって飯道山の修験が廃止せられた後も、池田村にあって岩本院を名のり、諸国に配札、加持祈祷のかたわら施薬を行っていたと伝えられる」(杣庄編 1975: 74)。

その後、渡辺詮吾は滝に戻り、慶應元（1865）年、19 歳の時に、庄屋の権右衛門の娘と結婚して婿養子なってから、岡山県美作への売薬行商をはじめる（人物誌編集委員会編 1980: 71; 杣庄編 1975: 74)。当初の行商は羽織、袴の正装で行い、荷物持ちの小僧とともに、訪れた土地の組頭や庄屋の自宅に人に来てもらい配札と売薬を現金取引でおこなっていた。その後は家々を訪れて売薬を配

14) 渡辺詮吾の姓は一般には「渡辺」と表記されるが、『甲賀人物誌』のみ「渡邉」と表記されている。本稿はより広く使われている「渡辺」の表記を用いた。

置するようになり、そのころの得意帳も残されているという（人物誌編集委員会編 1980: 71）。その後、配札禁止令と薬務行政が整備された後は、「売薬営業の鑑札を得て売薬を行う」ようになった（杣庄編 1975: 75）[15]。

岡山への行商で渡辺詮吾があつかった製剤は、「丸剤の功能円が最初」であり、「疳薬と清涼剤を併せた内容で、気付け、毒けし、その他諸病によし」とされた（人物誌編集委員会編 1980: 71）。岡山への行商は、製剤の処方を身につける機会にもなった。美作地方からの帰りに立ち寄った赤穂で煉薬「テリアカ」の配合と製法を習得した後には、近江で「最初」といわれる「テリアカ」を手掛けた（人物誌編集委員会編 1980: 71）。

渡辺詮吾のもとに弟子入りした者も多く、「最盛期には百余人に及ぶ行商人を容していた」ともいわれる（人物誌編集委員会編 1980: 71）[16]。そのなかでも、最初の弟子となった大北岩吉、藤岡繁蔵、岡本與三松（与三松）は、「三羽鳥」と呼ばれ、渡辺詮吾の「手足となって売薬の発展に協力した」人物として紹介される（人物誌編集委員会編 1980: 93）。この 3 人をはじめとする弟子たちに、渡辺詮吾は「売薬をすすめ、さらに独立営業させるなどして、甲賀町における売薬を拡大していった」（杣庄編 1975: 75）。「三羽鳥」と呼ばれた弟子たちは、その後、配置売薬の販路を各地に拡げたほか、同業者たちと提携して組合や株式会社の設立にもかかわった（人物誌編集委員会編 1980: 94–95, 100–101）。

甲賀の薬業の組織づくりにかかわった弟子たちを育てた先達でもある渡辺詮吾のとりくみは、配置売薬のみならず、「個人の営業から組合・企業としての営業へ一歩すすめた」ことが重要なとりくみであったと評価されている（杣庄編 1975: 75）。

5.3. 薬草の栽培を試みた岡本與三松

ここまで甲賀の薬業の発祥について、売薬の行商、製剤、販売にかかわった人物のとりくみからみてきた。いっぽうで、明治期以降には売薬の原料とする薬草の栽培を試みた人物もいた。それは「詮吾翁の後継者」とも「薬業基盤の立役者」とも紹介される、先にみた渡辺詮吾の弟子にあたる岡本與三松である（人物誌編集委員会編 1980: 100–102）（図 4）。

明治 4（1871）年、油日村の大字毛枚（もびら）に市郎左衛門の三男として生まれた岡本與三松は、大阪道修町の薬種問屋の小僧として働いていた（人物誌編集委員

15）明治政府は売薬取締規則や売薬印紙税法をはじめ薬事法を制度化して、薬業を取り締まりの対象とするようになった、明治政府による薬業政策とその影響、甲賀の人びとの対応は、進藤（1992）、杣中編（1975）に詳しい。

16）昭和 50 年以前の故人を対象に甲賀で活躍した人物の生い立ちと取り組みを、その人物写真とともに人物の特徴をあらわす小見出し入りで紹介した『甲賀人物誌』（人物誌編集委員会編 1980）には、渡邉詮吾とその弟子たちをはじめ、明治以降に薬業分野で活躍した個人が 20 名ほど紹介されている。それぞれの人物どうしの関係や取り組みから、甲賀の薬業にかかわった人のネットワークの形成とその広がりをみていくことは、今後の課題としたい。

図 3　渡辺詮吾（1847 ～ 1912）
出所）『甲賀人物誌』p.70

図 4　岡本與三松（1871 ～ 1949）
出所）『甲賀人物誌』p.100

会編 1980: 100）。そして、「たまたま帰郷の際に、詮吾翁に出逢う機会をえて、売薬の将来性を説かれ、また協力者として依頼された」ことが薬業の道へすすむはじまりとなった。弟子入りして数年後、岡本與三松は 18 歳で独立、それまでの配札先だけでなく、その他の地域にも進出して、三重県や東京都まで売薬を広げた。さらに、販路を拡大するのみにとどまらず、「薬品の製造許可をとり、詮吾薬房での経験を生かし「テリアカ」の調整を初め、五疳薬の製剤など着々と方剤をふやし」、「各地で開催された博覧会に出品して賞をえた」（人物誌編集委員会編 1980: 100）。

明治期中頃から大正期を経て昭和初期にかけて、岡本與三松は薬業にかかわる組合や会社をいくつも設立して、その役員をつとめた。そのなかで、大正 14（1925）年に副組合長、昭和 3（1925）年に組合長となった、甲賀郡売薬同業組合の在任中には、日野売薬同業組合と提携して、次の 4 つの計画を立て、滋賀県に陳情した（人物誌編集委員会編 1980: 101）。

第一に「県下一円の同業組合に統一すること」
第二に「山林及び荒れ地に薬草を栽培すること」
第三に「輸出を目的として海外へ視察団を派遣すること」
第四に「売薬試験場を設置すること」

この 4 つの計画のうち、3 つは実現したものの、残りの 1 つ、薬草の栽培は失敗した。薬草を栽培することで「優良生薬」を生産することはできたものの、「市価は安く、採算がとれず中止するに至った」からであった（人物誌編集委員会編 1980: 101）。

ここで、「くすりの生産」という観点から注目したいのは、岡本與三松がたてた計画のうち実現したものよりも、失敗した薬草の栽培がどのようなものであったかである。それは、より広くは、甲賀の売薬や生薬に使われた山野草の生産の実態はどうであったか、という問いにもつながる。そのためには、商用の生薬とともに、自家用の生薬、それぞれの生産についてより深く調べることが必要である。

商用の生薬については、どんな種類の植物を、どこで、どのように栽培したのか。誰の土地で栽培したのか、個人有林であったのか、区有林であったのか、入会地であったのか、どんな土地で栽培したのか、雑木林であったのか、人工林であったのか、山林ではなく草原のような場所もあったのか、などを精査していくことが求められる。ただし、明治直前までに山伏たちが薬の製剤を秘伝としてきたことをふまえると、その後の生薬の生産も商売上の秘密とされていたであろうことも気にとめておきたい。

他方の自家用の生薬については、上記の事項に加えて、山野草の知恵を人びとが次世代にどのように継承してきたのかを知ることが求められる。ただし、個々人が経験的に蓄積してきた知恵は日常的に当たり前のものとされてきたことが想像される。文書の記録からだけでなく、フィールドワークや現地の人への聞取りからも調べていくことが求められる。

明治初期に甲賀の薬業を営んだ人びとは、「自家で原料を仕入れ、売薬に製造し、自家の得意に消費していた」といわれている（杣庄編 1975: 80）。しかしながら、当時の売薬業者たちが、何を売薬の原料とし、その素材をどこから仕入れたのかは、これまでに刊行された甲賀の売薬について述べた文献から詳しいことを知ることはできなかった。商用の薬草の栽培と合わせて深く掘り下げることが課題であろう。

6.　現代の甲賀にみる薬草・薬業にかかわる地域活動

19 世紀末から 20 世紀初頭以降の甲賀の売薬や生薬の生産の実態を知ることとは、これからの課題であるが、そのいっぽうで、21 世紀の甲賀では薬草の利用や薬業の歴史を掘り起こし、将来への継承をめざすとりくみがある。

6.1. 里山イベント「甲賀忍者里山を行く」

「甲賀忍者里山を行く」は、甲賀町の大久保で里山の活動にとりくむ大久保里山再生委員会と SATOYAMA+ が主催するイベントである。里山に人の手が入ることが少なくなった現代のなかで、「里山に忍者を入れる」ことで里山に人が訪れるきっかけをつくっている[17]。最初に開催されたのが 2018 年 11 月。

17) 現代の人口減少を背景にして里山の手入れを誰が担うのかが課題になるなかで、野洲川上流域にある甲賀町で森林保全に取り組む団体は多様化しており、森林保全に新たな意味を見出すとりくみを実践している（石橋・石田・高橋 2020）。

その翌年 2019 年 10 月には 2 日間にわたり、滋賀県立大学の留学生と地元の人が一緒に里山の道を整備して歩き、どんな山野草があるのかを実地で学ぶとともに、江戸時代に建てられた役行者の像を題材に修験道の歴史を学んだ（石橋・石田・高橋 2020: 127）（写真 3）[18]。

6.2. くすり学習館

くすり学習館は、「人と薬の関わりを体験・学習」することをテーマとする甲賀市の施設である [19]。平成 22（2010）年 8 月に開設された（甲賀市史編さん委員会 2015: 595）。常設展示室には、配置売薬や滋賀の薬業にかかわる製薬道具や看板や広告など江戸時代からの資料を歴史に沿う形で展示している（図 5）。企画展室には館が所蔵する資料や特定のテーマにかんする企画展が行われており、2020 年 9 月から 2021 年 3 月にかけては開館 10 周年企画展「くすりと甲賀忍者〜その知恵と技」が開催された。健康に関心をもつ子どもや大人を対象とした体験学習のイベントも行われており、丸薬づくりや実験、健康ワークショップなどが開かれている。

写真 3　甲賀忍者里山を行く（2019 年 10 月 19-20 日、筆者撮影）
左は、里山の歩道を整備する地元の人と留学生
右上は、山の上にある役行者の像
右下は、スズメウリの果実

18)「甲賀忍者里山を行く 2019」と題したこのイベントの様子は、総合地球環境学研究所・栄養循環プロジェクトの次の Facebook 記事を参照されたい。
イベント 1 日目（https://www.facebook.com/chikyu.erec/posts/2418076731846908）
イベント 2 日目（https://www.facebook.com/chikyu.erec/posts/2418081038513144）
19) 人と薬の関わりを体験・学習｜甲賀市 くすり学習館（kusuri-gakushukan.com）。

6.3. 甲賀のくすりコンソーシアム

2021 年 12 月 20 日、くすりをいかしたまちづくりをめざして「甲賀のくすりコンソーシアム」が設立された[20]。くすりの関心を高めるために「くすり文化」の継承と情報発信を行うとともに、くすり産業を振興にむけたとりくみとしてはじまった。その担い手として、企業、自治体、行政、小中学校、高校、大学、市民団体が連携する。薬業と観光業それぞれを視野に入れて薬草園の整備や忍者や里山にかかわる活動が構想されている。

図 5　くすり学習館・常設展示室
出所）くすり学習館ホームページ「施設概要」
（http://www.kusuri-gakushukan.com/display/）2022 年 2 月 21 日閲覧

7.　おわりに

本稿では、鈴鹿山脈南麓と琵琶湖・野洲川上流域の環境をふまえながら、甲賀の薬業と薬草利用にかかわる歴史的背景と現代の地域活動を概観してきた。甲賀の薬業史は、山伏の配札から配置売薬が生まれたこと、その後の商売としての展開については、地域の郷土誌や既刊の文献にみることができるいっぽうで、その原料の入手先や薬草の栽培にかかわる生産の実態がどうであったかは断片的にしかわからないことが多い。

一つのヒントになると思われることは、江戸末期から明治初期にかけて山伏や薬業を起こした人びとが配札先や配置売薬の行商で各地を歩きまわっていたことである。渡辺詮吾が岡山でテリアカの製法を学び、それをもとに近江初のテリアカをつくったように、製剤の知見とともに、その原料も調達していたと思われる[21]。そうした動きをみていくことで、外部から得た知見や材料を地

20）くすり学習館ブログ記事「甲賀のくすりをまちづくりに活かす「甲賀のくすりコンソーシアム」が設立されました」人と薬の関わりを体験・学習｜甲賀市 くすり学習館（http://www.kusuri-gakushukan.com/）（2020 年 2 月 28 日閲覧）。

21）例えば、渡辺詮吾の子息が設立した製薬会社の近江製薬は、そのホームページに和漢薬の原料として沈香末や龍脳など熱帯産の材料をふくむことが紹介されている。近江製薬株式会社 公式サイト 萬病感應丸 A 本舗（ohmi-seiyaku.com）（2020 年 3 月 21 日閲覧）。

元のものと組み合わせて、甲賀に特有のくすりをつくりだそうとしてきたことを見出す可能性も開けてくるのではないか。

そのさいには、甲賀生まれの人びとだけでなく、外部から甲賀の薬業や薬草の利用にどんな人物がかかわったのか、とくに滋賀県と隣接する京都や三重から鈴鹿山脈を訪れた本草学者や、京都から訪れた薬種問屋などが、甲賀の薬草や薬業とどのようなかかわりがあったのかを見ていくことが求められる。加えて、江戸時代から明治にかけての政府が鈴鹿山脈の薬草をどうみていたのかを、海外貿易との関係を視野にいれて検討することで、当時の政策と地域との関係を同時代のアジアにおける薬草の流通のなかに位置づけることもできよう。本稿は甲賀の薬業から配置売薬の起こりをみてきたが、富山や奈良など配置売薬で知られるその他の地域と比較した時にどんな特徴があるのかをみていくことで、甲賀の薬業を相対的に位置づけることができるだろう。

以上のような甲賀の薬業や薬草の利用に関する歴史への関心を深めるとともに、それを現在の地域活動にどのようにいかすことができるかを、地域の環境と文化や健康や産業との関係も視野に入れて「くすり」にかかわる学問を現場の実践につないでいくことが期待される。

謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会－生態システムの健全性（D06-14200119）」の一環として甲賀市で実施したフィールドワークおよび文献調査で収集した資料を参照した。甲賀でのフィールドワークでは SATOYAMA+、大久保里山再生員会、甲賀市くすり学習館、甲賀忍術研究会をはじめ、地域活動にとりくむ団体、現地にお住まいの皆様から薬草にかかわる歴史と現状を学ぶ機会をいただきました。CIRAS 共同研究研究会での発表では研究会メンバーの阿部大地氏、岡田雅志氏、柳澤雅之氏をはじめ、甲賀市在住の中島教芳氏、市川ゆきひろ氏、滋賀県立大学の高橋卓也氏よりコメントをいただきました。ご助言、ご助力をいただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

参考文献

油日創意と工夫の郷づくり委員会（1998）『ふるさと油日』油日創意と工夫の郷づくり委員会／甲賀町 .

福岡誠行（1965）「伊吹・鈴鹿山脈の植物地理」『*Acta Phytotaxonomica et Geobotanica*（植物分類・地理）』11(5-6): 133-140.

石橋弘之・石田卓也・高橋卓也（2020）「上流の森を保全する多様な主体の「緩やかなつながり」」. 脇田健一・谷内茂雄・奥田昇（編）『流域ガバナンス：地域の「しあわせ」と流域の「健全性」』京都大学学術出版会，pp. 117-132.

石丸正運（2005）「飯道山」木村至宏『淡海文庫 33 近江　山の文化史――文化と進行の伝播をたずねて』サンライズ出版，pp. 111-117.

人物誌編集委員会編（1980）『甲賀人物誌』甲賀町教育委員会.
神郷土史編集委員会編（1999）『ふるさと神村』滋賀県甲賀郡甲賀町大字神.
甲賀市史編さん委員会編（2007）『甲賀市史第 1 巻　古代の甲賀』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会（2014）『甲賀市史第 3 巻　道・町・村の江戸時代』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会（2015）『甲賀市史第 4 巻　明日の甲賀への歩み』甲賀市.
甲賀市史編さん委員会編（2016）『甲賀市史第 8 巻 甲賀市事典』甲賀市.
大原貯水池土地改良区（2003）『土地改良区設立 50 年記念誌 水六十年』大原貯水池土地改良区.
滋賀県・甲賀市（2018）『甲賀市森林整備計画（案）平成 30 年樹立』.
進藤勝美（1992）「甲賀・日野の薬業――その生成と現状」『聖隷学園聖泉短期大学人文・社会科学論集』pp. 54–86.
杣庄章夫編（1975）『滋賀の薬業史』滋賀県薬業協会.